

葉山嘉樹
の
寄生虫

荒木優太

序、幸福と寄生虫——『求めよ』

葉山嘉樹の小説に、『求めよ』という生前未発表のテキストがある。『求めよ』は昭和一三年に執筆されたとされる短編小説で、「私」が「幸福になる方法」を発見したと言って、幸福について一方的に論議していく（葉山には珍しい）観念的な小説だ。「私」は実体験として「幸福を発見し、それを未来永劫、離さない確信を持つに至りました時」というのが「もつとも不幸な時」であるということに気づく。その具体的内容には触れられないが、ともかく、幸福になりたければ不幸にならなければいけないという逆説を「私」は信じ込み、肉体的にも精神的にも「自分を意地悪く、辛く当たつてやらねば」と思うようになる。そんなおり、町から山の小屋へ重荷を背負って肉体を苛めている最中、崖の上で荷を下ろして休んでいると一陣の風が吹いて「何となしにいい気持」になってしまう。そこで「私」は「事によると、こいつが幸福つて奴ぢやないかな」と思い、自己内対話を始める。「いや、決して幸福ぢやない」「不幸にもかうホツとした、と云ふ瞬間があるもんだ」云々。そうして、「私」は幸福とは「寄生虫」なのではないかというアイデアを思いつく。「幸福と云ふものは、寄生虫見たいなものだらう、と私は考へた。それ自身では存在し得ないのだ。常に何物かの腸の中か、胃の中か、又は肝の中にもぐり込んでゐる。その幸福の寄生虫のために、幸福な人間が不幸にも病気になつたり衰弱したりする時に、始めて自分の腹ん中に、「忌々しくも、今まで幸福が寄生してゐた」と云ふことに気がつく」（『求めよ』）

幸福とは寄生虫である。その意味は、主体の意識や意志の如何に関わらず、気づかぬうちに自分の内部に自動的に形成される幸への傾きを指している。彼は「幸福と云ふものを寄生虫扱ひにしてはいかん。それは不穩当だ。それは努力して得られるものだ」と自分自身で反論しているが、それで納得することはできない。幸福になるのに努力はいらない。勝手に幸福になるのだから。この発想はある意味で残酷だ。というのも、もし幸福になるのに努力がいらないのだとしたら、どんなに努力をしてもその先に幸福は約束されず、その営みがすべてフイになるかもしれないからだ。或いは、寄生虫的幸福は一見、メーテルリンク的「幸せの青い鳥」と似ているようで、実は違う。「青い鳥」は遠くにあると思っていたものが、実は身近にあったという説教であったが、寄生虫は自らの家の中以上に、自分自身の内におり、しかもそれに気づくことができるのは、「病気」や「衰弱」など幸福が毀損されたとき、その落差（ギャップ）の感覚のなかで間接的に推し量れるにすぎない。

しかしながら、幸福が寄生虫であるのだとしたら、人間はより多くのバラエティに富んだ寄生虫に、しかも気づかないうちに、寄生されているというべきなのではないか。『求めよ』のアイデアはそのような問いへと読む者を差し向ける。人間とは一個の家屋のようなもので、そこには幸福や病や不安や希望が、時折メンバーを交代しながら一緒になってその住居を間借りし、共同生活を営んでいるのではないか。断っておけば、次節以降に記す理由によって、葉山自身はその発想を却下するだろう。葉山は寄る辺なき独立性を謳う。しかし、結果的に葉山嘉樹のテキストはその多様な寄生的アスペクトを切り捨てることができなかった、といえよう。端的に言えば、葉山文学にとって生とは常に寄生だった。

一、生活と寄生虫——『悪夢』

「寄生虫」の表象をたどることで、葉山文学の本質的性格を考えることができる。事実、葉山嘉樹は寄生虫の強迫観念にとりつかれていた男だった。糊沢健は葉山が「虫」に憑依されていた」と述べて、テキストに頻出する「虫」を数えていたが（『葉山嘉樹の昆虫記——『移動する村落』における戦争・新聞・歳時記……——』、『日本文学』平一二・九）、蚊にしる虱にしる、そのいくつかが吸血生物、つまりは寄生虫だったことに注意していい。

寄生虫、パラサイト。宿主にとり付き、その栄養を掠め取ることで、一方的な共生関係を構築していく。パラサイトは、ギリシャ語 parasitos を語源としており、かたわらで食べる人、の意味をもつ。今日、パラサイト・シングル（成人しても実家に留まって生活する未婚の男女）という名称において典型的に表象されているように、そこには成熟観念に付随する独立や自立の欠如、つまりは依存や甘えといった未成熟のイメージがまわりついている。一人前になること、端的に言って大人になること、それは経済的に独立することであり、自分だけの我が家を構えることであり、他人の手を借りないで生きていくことである。その観点から見れば、パラサイトとは成熟を忌避する無責任で迷惑な幼さにすぎない。そのプレッシャーが寄生虫的強迫観念を結実させる。寄生してはならない、早く一人前にならなくては、というわけだ。寄生虫とは半人前（＝一人の大人に相当しない）なのだ。

そのような観念は小説家葉山の自虐的文学観に間接的に現れている。「つゆ空の文学を語る」（『報知新聞』昭八・七・六～九）というエッセイでは、「小説家とは人間の屑だ。だから小説は、人間の屑から見た人間の生活を描くことにある」と述べ、小説家のもっている権威性を相対化している。とりわけ、葉山は自身が勧めるプロレタリア文学を「遺言文学」と呼んでいた（「遺言文学」、『東京朝日新聞』昭七・一〇・二三～二五）。「遺言文学」とは「文学士の肩書も無ければ、それらしい何にも無い。参考すべき外国の処世も読めない」葉山自身が死を覚悟して「捨て身」で書いた遺言に等しい文学作品を指す。青野季吉の「調べた芸術」や蔵原惟人の「プロレタリア・レアリズム」のような理論的文学論も外国文学の教養も乏しい葉山にとって、唯一他のマルクス主義文学者より勝るものがあるとすれば、それは命を賭けるという強い精神性でしかない。葉山にとって文学とはコンプレックスなしには成立しえないものであり、経済的独立や真つ当な生活とは無関係に結実するものだ。水上勲はその傾向を「徹底的な自己卑下（下降志向）」、前衛ならぬ「後衛志向」と呼んでいる（「昭和十年代の葉山嘉樹論」、『帝塚山大学論集』昭五五・一二）。

自伝的小説『海と山と』（河出書房、昭一四・二）の或る登場人物は「文学の方が先きに生れて、それから人間が生れて来たのぢやあるまい、と思ふんだ。〔中略〕やつぱり文学よりか生活の方が先決問題だと思ふんだ」と語っていたが、大学を中退した若き葉山にとってその「先決問題」は第一に船乗り生活を意味していた。『海と山と』は新米マドロスになるまでのその経緯を題材にしたテキストであるが、そこでの経験がプロレタリア文学の傑作『海に生きる人々』（改造社、大一五・一〇）に活かされたことはよく知られている。しかし、そこで待っていたのが正に「寄生虫」コンプレックスだった。

マドロス小説の一つである『悪夢』（『週刊朝日』昭四・三）は、マドロスである「私」が船上でボロワイヤー整備の仕事をしている最中、誤ってそれを踏んづけ足を負傷し、仕事ができなくなる船上の小景を描いたものだが、そこで「私」は仕事ができなくなってセーラーから「この野郎は寄生虫だ！ 甘えてゐるんだ！」と罵倒される「悪夢」を見る。しかし、それ単なる夢にすぎず、目覚めると「私を呪つてゐるのではなくて、氣遣つていろと相談してくれてゐた」のだった。しかし、それでも、「私」の「寄生虫」妄想は止まなかったようにみえる。というのも、「私」は船員が寝静まった夜中、「出血して死んでもいゝ決心で、足首のバンドを解」き、「出血のため、字義通り死に等しい眠りに落ちてゐるのを発見される」に至るからだ。

一種の自殺未遂だ。船長などには、「私」の行為は「船の手当に抵抗して、自殺してまで抗争しようとする」などと誤解されるが、無論、「私」の自殺未遂は抗議ではなく、自己卑下であり、(船員に迷惑をかけているのではないかという)加害妄想の結果だ。「俺は俺にとつても、また他の仲間たちにとつても、たゞ邪魔な肉塊であるに過ぎなくなるのだらう」という不安が、いたたまれなさ(=その場所に居るに値しない感覚)を煽る。それが自傷行為を準備する。

さて、この寄生虫コンプレックスは、より後期、プロレタリア文学から転向して体制順応的な作家に転身と言われる昭和一〇年代にも受け継がれた。というよりも、その時までは余り顕示的ではなかった妄想が、その年代でより深刻に表出してくる。その結晶が、正に本稿で分析の主たる対象としたい、その名も『寄生虫』(『ユーモアクラブ』昭一六・三)である。『寄生虫』は寄生虫=蛔虫にとりつかれた愛娘の看病記で、大雑把に言えば葉山が一〇年代によく書いていた私小説ものに分類される。しかし、葉山のテキストを通読してみれば、それは単なる身辺雑記というよりも、日常的風景に自身のコンプレックスを偽装的に重ね書きした複雑なテキストであることが分かる。とりわけ、『寄生虫』が『悪夢』のような先行する「寄生虫」テキストと違うのは、仲間や家族や隣人への寄生ではなく、戦争の非常事態にある国家への寄生に問題が拡大されている点、つまりは私的な枠組みだったものに、公的な枠組みが紛れ込んでいる点にある。ここに葉山に巣食う「寄生虫」の連続と切断がある。

二三確認しておくべきことがある。昭和八年に『戦旗』派の代表的プロレタリア作家である小林多喜二が虐殺され、以降プロレタリア文学退潮の時代が到来し、葉山は東京で作家生活を続けることができなくなり、昭和九年から、長野県赤穂村や妻菊江の実家である岐阜県恵那郡へと移転する。妻の実家では寄食者として生活し、生れて初めて農業を試みても、結局、挫折してしまう。要するに、葉山にとって昭和一〇年代は自身の生活者としての無能と相対さなければならぬ過酷な時代だった。葉山は体制順応的に転向したといわれた。そして、晩年には悪名高い満州国開拓事業にも参加するわけだが、その動機にあったのが、生活者としての自信喪失(アイデンティティの危機)に対する一方策だったのではないかとする、鈴木章吾の意見は十分に首肯できるものだ(「満州開拓」と葉山嘉樹——アイデンティティ喪失と回復への旅立ち——、『社会文学』平一九・二)。

とりわけ農業、「百姓」に挫折した経験は葉山にとって大きなものだったように思われる。「村の白痴の思ひ」(『報知新聞』昭一二・七・一一～一四)では「私には月給を百円貰つても、百姓は出来ないだらう」と農業に諦念を抱き、「私への註文」(『帝国大学新聞』昭一三・一〇・三一)では「読書したり執筆したり、ものを考へたりしてゐれば、百姓仕事はお留守になつて終ふ」という理由で、「百姓と文学と両立が出来るか、と云ふ疑」を持つ。ある程度、農村生活を続けていても「百姓をやつてゐるが、まるで半人前どころか十分の一の能力もない」(「祖国は進む」、『海を越えて』昭一四・八)と、決して農村生活に慣れることはなかった。自分が食うための米を自分で作れない。ならば、葉山は寄食者にならざるをえない。そして当然のことながら、その「寄食」性はほとんど「寄生」性と相違ない。昭和一五年、岐阜県山口村での生活に材をとった短篇小説『子を護る』では村共同体に馴染めないにも関わらず「寄食」を頼るしかない複雑な心情が吐露されている。

「それがどのやうに苦しい道であらうとも、私はたゞ、村の人々への寄食を求める以外に術がなかつた。朝起きて、夜寝るまで、絶えず村人の勤労を見て、それへの感謝と、寄食の許しを求め続けるのは、正直な話私にはひどくこたへた」(『子を護る』、『改造』昭一六・二)

このテキストにおいて、既に公的な枠組みが活性化している。というのも、「日本は第二次内閣にあつて、新体制へ邁進し」「これに応へる為には、私は私自身をとつちめるに限る」とされているからだ。この「とつちめ」はそれ以前の「遺言文学」観にも既に現れていたが、しかし、特筆すべきなのは、国家の直面する課題がシームレスに「私」の日常生活の内容如何に結ばれているという点だ。その意味で、『子を護る』は

『寄生虫』を準備しているといえるが（後者は前者の一ヶ月後に発表された）、『寄生虫』の物語構造はもう少し複雑であるといえる。

二、国家と寄生虫——『寄生虫』

『寄生虫』は「吸込をしてくれ」という愛娘の言葉から始まる。蛔虫性肺炎となってから三ヶ月、「蛔虫と云う奴は、一度にころりと参つてみんな揃つて出て来ない」という理由により、駆虫剤を飲ませるなどの治療はそれほどの長期間を要した。三ヶ月にもなると、「卵の目玉をくれ」「林檎を卸してくれ」など、娘は栄養物を延々と要求してくる。父の言に従えば、寄生虫が「咽喉のどこまで出張して来て、うちの子にいろんなものを強請する」のだ。寄生虫にやる栄養などない。とりわけ、「この非常時の大切な栄養を蛔虫に食はせるなんて、これ以上、これ以上非国家的な話はない」。そのうちに父親は自身の腹の中にも蛔虫がいるのではないかという疑心に囚われ、憤激する。「蛔虫などと云ふものが、手もないくせに頭をかかへたりして、腹の中にあるかも知れないと思ふと、私の憤りも亦高まつて来」、「蛔虫は永遠に私を救ひ難い憂悶に陥れる」。これで了だ。

既に明らかなように、寄生虫は父親である「私」の自画像だ。彼の腹の中に蛔虫がいるのではなく、彼自身が蛔虫だ。それは昭和初期から続く『悪夢』的「寄生虫」妄想や『子を護る』的「寄食」コンプレックスといった作家論的文脈性もさることであるが、何より、テキスト上での父と虫とのアナロジカルな関係でも読みとることができる。娘の便から出てきた虫は「貴様見たいな強靱な弾力性があれば、きつとゴムの代用品になる」ほどに「ペロリと食ひ太」っているが、同じく、「不便なところでの生活や、子等の病苦と戦つてゐるうちに、私の血圧は高くなり、私は膨れ上つちまつ」ていた。「何と云う太い野郎だ」という嘲りの言葉は父親自身に還つて来るものだ。また、看病生活を続けるなかで父親は「無理に無理を重ねて、酒でごまかしてゐるうちに、今度は私自身がをかしくなつて来た」、つまりは「動くのがいやになつて来た」という。その籠もりがちの姿は、なかなか娘の体内から出ようとしないう蛔虫のそれを彷彿とさせる。両者は似た者同士だ。父親は「奴はたゞ這ひずりまはつて、食つてさへありやいいんだが、こつちはさうは行かない」と、自分と蛔虫の間に差異を見出そうとするが、掃除や原稿書きなどやりたいことの諸々は結局、「肺炎に乗じて腹に〔虫が〕湧いたためにめちやに叩きつぶされてしまつ」ている。虫が寄生するように、父親も事実上、家族や村といった共同体に寄生している。

病身の子供に与える白砂糖をケチり、その子に「下駄の一足も買つてやり度い」にも関わらず、「赤い足袋だけ買つても持たせて」済ませている作中の挿話から分かるのは、父親の経済的貧窮状況である。そこには勿論、太平洋戦争という時代背景も存在する、「この非常時の大切な栄養を蛔虫に食はせるなんて、これ以上、これ以上非国家的な話はない」。しかし、父親もまた「寄生虫」なのだから、この言葉は自虐としても機能してしまっている。このように、『寄生虫』はそれ以前から葉山が抱いていた寄生虫コンプレックスを昭和一〇年代のバージョンとして展開してみせた決定作として読むことができる。そしてそこでは、コンプレックスも強化され、それは帰属する共同体を越えて、公の国家に対してさえ存立している。「骨と皮ばかりの子供が、〔中略〕文字通り死線を越えてゐる時、そいつを腸の中で、下は大腸から上は咽喉までも、餌を漁りに来る蛔虫と云ふ奴は、こいつ正に人類の敵だ」という父親の言葉に、「非常時」の日本国に住み着く「動くのがいやになつて来た」父親自身の姿を重ね合わせることはたやすい。「寄生虫的純消費者」（「母村と分村」『開拓』昭一九・一二）である。

父親が蛔虫と比喩的な関係にあることは明らかだ。しかし、このテキストが複雑なのはそれとは別の文脈からの読解を許す点にある。それは、寄生虫の片付かなさに由来している。そもそも、父親の生は、比喻ではなしに、事実として寄生虫に寄生している点は読み逃してはならない。というのも、妻が看病疲れで倒れ、自身も「をかしくなつて」「死ぬこと許り考へるやうになつて来た」にも関わらず、逆説的なことに、その原因である「蛔虫の姿を見ると私の心に勇気が奮ひ起き」て来るからだ。

「俺の娘の生命の恢復を横取りしてみた奴はこいつ等だつた。よし、俺は世の中から蛔虫と云うものを撲滅する運動を起こす。一人の病児のみではなく、一家中全部を殆んど破滅の淵にまで導いたのが、この、ヌルの蛔虫の野郎なんだ」（『寄生虫』）

虫がいるから死線に近づくが、同時に、虫がいるから生きる希望が与えられる。父親は寄生虫に蝕まれた子供の生に寄生している。父親は「この子を殺す位なら俺が死ぬ」と思う。逆にいえば、子供の生命のためならば、たとえ「死ぬこと許り考へ」「もう大した御奉公もできない体だから惜しくない、と思つてゐ」ても、看病のため、或いは「親の責任」のために、生きなくてはならない。父親の生は子供のそれに左右されているという点で、寄生的である。蛔虫は確かに、家族、とりわけ父親に対して大きな危機を与える。しかし、父はその危機的契機を受け止めつつ、その契機に適合した生の形を模索することで、蛔虫（とそれに巢食われた子供）との寄生＝共生を、図らずも実現させる。

父親は蛔虫「撲滅」運動を語るが、それは当然失敗する宿命にある。一つには、公的意識によって触発されたために、無謀にもその「撲滅」射程が自分の家以上に「世の中」にまで拡張してしまっている点も勿論ある。しかし、そもそも寄生虫は両義的に作用し、確かに虫によって公的意識が触発されるものの、他方で、子供の生に寄生した父親は看病の忙しさから「世界情勢や国内情勢は、新聞を読んでいる暇がないから、私には子供の容態と、私がだんだん膨れ上つて行くのが分るだけだつた」という。寄生虫は「非常時」の意識を刺激するものの、同時に「非常時」の真っ只中にあるはずの祖国や国家間の情報を遮断させもする。寄生虫は国家への回路を開くと同時に回路を攪乱するノイズ（＝寄生音 bruits parasites）にもなる。

しかも加えて、その状態は終わることがない。『寄生虫』では、繰り返し虫の無数性に注意が向けられていた。計六匹の虫を取り出しても、「完全に退治たかどうだか分からない」し、「まだ、腹の中に何匹残つてゐるか分からない」し、何より「私の腹ん中にも案外居るかも知れない」。この無数性、どこまでが際限なのかが決定することさえできない無限性が、最後の一文「永遠に私を救ひ難い憂悶に陥れる」に帰結することは明らかだ。虫との戦いはいつ終わるのか分からない。その果てなさが「永遠」の感覚を父親に与えるのだ。ならば、完全なる「撲滅」など不可能であり、虫の無数性は父親に対して「永遠」に生きよと命じてくる。

ここから導き出されてくるのは、「寄生虫」の徹底的な片付かなさである。父親は虫を憎悪しつつも、子供に寄生した虫に寄生して生きている。国家的に見て虫が敵であることは明らかであるが、その敵は国家を無視し病身の子供に集中することで父親の責任を果たすように仕向けてくる。そしていずれにせよ、寄生虫の無数性は終わらない戦い、「永遠」のなかに父親を投げ込む。何一つとして片付くことなどない。「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時までも続くのさ」という漱石『道草』の有名な文句は、正に葉山の「寄生虫」にこそ捧げられるべき言葉である。

三、思想と寄生虫——『尻尾は尻に』

『寄生虫』は一方で、葉山が初期から持っていたコンプレックスが国家の「非常時」によって乗っ取られた昭和一〇年代版の一作として読むことができる。しかし、他方で、『寄生虫』は「寄生虫」というものの決定的な片付かなさ、終わりのなさを明快に描いたテキストとしても評価できる。第一に、虫に蝕まれた子供の看病のなかで父親は死をも覚悟する危機的状況に追い込まれるが、同時に、危機に瀕した子供の生に呼応して自身の生に対する執着を回復させる。寄生虫のおかげで、父親の生は寄生的に転回する。第二に、虫に犯された子供に対して公的枠組みが活性化されるが、父は当の子供の看病に忙殺されて公的情報を得ることができなくなる。国家の敵と目される寄生虫によって、国家的なものが締め出され、子供と父親の私的空間を濃厚にする。そして、どちらにせよ、その原因である寄生虫を「撲滅」することは難しく、両義的な（＝曖昧な）状況は「永遠」に続く。

第二の解釈（片付かなさの解釈）は一見、作家論的文脈において正統性がないようにみえる。しかし、無数に蠢き片の付かない寄生虫は、葉山の他のテキストにも登場してくるものだ。『寄生虫』では、蛔虫が頭も手もない「尻尾」であるという外的特徴が特筆されていた。

「〔子供が〕指で口の中を掻きまはすから、女房が手を入れて見ると、そいつの尻尾だか頭だか、えい、貴様に頭なんかあるもんか、あつたら両方とも尻尾だ、その尻尾をまへて引つ張り出したわけなんだ。見るも汚らはしい胴輪を嵌めてやがる。暇にまかせて磨いてやがると見せて、ピカピカに光つてやがる。何と云ふ頭、いや尻尾だ。尻尾のくせに頭の格好をしてやがるぢやないか。栄養を吸ひいいやうに、食道ばかり太く設計しやがつたから、だらしのない頭、いや尻尾になつちまつたんだ」（『寄生虫』）

蛔虫は「尻尾」だけでできている。頭がないために思慮がなく、「このいやらしい虫の野郎は尻尾を振つて、いいか、二つもある尻尾を振つて餌に飛びつく」。或いは、四肢がなく、というのも「手は働くものにだけ必要だが、ただ、寄生している虫には手なんて要りはしない」からだ。尻尾だけの寄生虫。葉山はそのような、或いはそれ以上に異形な「尻尾」に蝕まれた男を描いている。書簡体で綴られた、やはり生前未発表の短篇小説『尻尾は尻に』。昭和一二年の一〇月に執筆されたこの作は、「A・F様」に宛てられた書簡であり、「私の頭は実に悪く、濁り切つてゐます」と、「私」が罹っている精神的な病状を伝えることが主たる内容となっている。具体的にいえば、男は「思想」という蛔虫のごとき寄生虫に精神を蝕まれているのだ。「私の頭の中には今、尻尾だけあつて、頭も胴体も手足もない思想だけが、うようよ入り込んで参りました。／この尻尾には私も弱りました。何故かつて云ひますと、メフィストフェレスのに似た尻尾だの、竜の落し子のに似た尻尾だの、電気スタンドの鉄製螺旋に似た、どつちにでも曲つて、それでゐてチャンとその位置に止まつてゐるあの尻尾だか胴体だか分らないやうな瓦斯体の尻尾だの、燕尾服の一つだけになつたのに似た尻尾だの、とにかく、そんな風な尻尾が、蛆が湧きでもしたやうに、ノロノロと頭の中で尻尾を振るのです」（『尻尾は尻に』）

もはや、幸福とは寄生虫なのではないか、などと言っている場合ではない。正体不明の多様な思想の「尻尾」が、無数に頭の中をかき乱す。尻尾が寄生する。しかも困ることには、それら尻尾は「絶対に明確な姿」をもたず、「紛れた糸のやうに、尻尾同志で纏れてゐるものですから、どこからどこまでが、メフィストの綿製メリヤスの尻尾だが〔「か」の間違いか？〕、電気スタンドの螺旋だか、途中で分らなくなつて終ふ」。それら尻尾は一つ一つが独立して別個に動くというよりも、相互が絡み合つて連動し、自他の識別をことごとく曖昧にして、群れをなして蠢き続ける。その無数性は、蛔虫以上に、「撲滅」の不可能性を決定的に告げている。

神経症を思わせるこのような描写は、翻つてみれば『悪夢』の主人公の病的性質について再考させる。不

注意でボロボロのワイヤーを踏んでしまった主人公は元々、先端恐怖症のような強迫観念に悩まされていた男だった。元来、「ワイヤ仕事は苦手」であり、それというのも「亀の子束子のやうに周囲に、鋼鉄の針金が突ん出てゐるのは見るだけで、私の視神経を堪らなく刺戟した」からだ。例えば、そのような病癖をもつために、小学校時代の体操の授業で、「松の葉」の「鋭い先端」に恐怖し、その瞬間に凍りついてしまい、教員に怒られた過去が彼にはあった。彼が踏むボロワイヤーは「鎌切虫の腹から出た虫見たいな格好で、長く渦を巻いて全で生きてゐるやうに、鈍く動いていた」と描写されていたが、カマキリ（やバッタ）の腹を水に浸すと出てくるのはハリガネムシと呼ばれる、これまたやはり寄生虫である。『悪夢』とはいわば、寄生虫表象によって足を怪我し、寄生虫妄想を生みだすに至る寄生虫小説だったのだ。寄生虫は寄生虫を呼び込み、増殖し、群れをなして蠢き騒ぐ。

『尻尾は尻に』の病的で観念的な寄生虫は、既に『悪夢』によって準備されている。「瓶掃除用のぶらし見たいにサ、クレ立つて、字義通り手がつけられないボロワイヤ」、「細い、その上に沢山固まつて、先の尖ったもの」は、頭の中に住み着く無数の「尻尾」に似ていないだろうか。『悪夢』の主人公が命じられた仕事は具体的にボロワイヤーのささくれだった部分を除去したり、先端を輪状にして結ぶ「目」＝「アイ」を作ることだったが、その作業に主人公の「視神経」は耐えられなかった。ワイヤーに住み着く寄生虫は「アイ」に封殺される前に、「眼」に寄生し、寄生虫妄想を育て上げる。身体にしろ、精神にしろ、住み着いた寄生虫の繁殖力は凄まじい。

それ故に、改めて強調しておくが、『寄生虫』は葉山のコンプレックスの形象化としてもさることながら、このような寄生虫の繁殖性の文脈からも読むことができるテキストであるといえるのだ。象徴的にいえば、『寄生虫』というテキストは、先行するテキストに寄生されている。蛔虫は父親の生活を危機に陥れると同時に新たな生の希望ともなる。国家へ開かれると同時に国家を締め出す。そのなかで寄生虫は繁殖し、「永遠」に繁栄しようとする。「撲滅」することはできない。この片付かなさこそが、父親の「救ひ難い憂悶」の背面で読むべき小説のもう一つのメッセージである。

連続性は、転向を経ても本質的な変化を被らなかつた「寄生虫」の片付かなさを見てみてもよく分かる。

片付かなさ、終わらなさ、しぶとさ。『尻尾は尻に』では「尻尾」の「過程」性に注目していた。「大体尻尾と云ふものは、進化の過程にあつたもので、人間に於きましては、僅かに骨の一端にその根跡を止めるだけなのでありますが、その長い進化の歴史の間に、折角振り捨てた尻尾に、今になつて身体全部、家族全部を親子心中刹那前まで持つて行く、と云ふことは、これは明白に歴史の逆行であります」（『尻尾は尻に』）

心配せずとも「尻尾」が突き動かすのは（『寄生虫』がそうであつたように）厳密に「刹那前」だけだろう。「尻尾」の寄生虫にとって、宿主の死こそ「心中」に等しいのだから。そして、寄生虫の寄生的世界は、進化論的な上位の目指すべき目的を拒否し、時には「逆行」しながら、群れをなしてただただ生きることに集中する。「尻尾」が元々「スピードを速めたり、急激な方向転換をやるべき時に、振り廻す為の天恵」であつたことを考えれば、無数の「尻尾」が導くその歩みは、目的を見失い方向も定まらないランダム・ウォークにならざるをえない。始まるのは「永遠」の彷徨である。

「文学に手段はない。と近頃僕は思つてゐます。若い時は、文学も一つの手段と思つてゐたが、今は違ひます。文学が真理を追及するものである限りは、それ自体が目的です」（広野八郎宛書簡、昭一二・一二・二九、広野『葉山嘉樹・私史』収、第六章、たいまつ社、昭五五・六）

戦後の平野謙的「政治と文学」論を先取りしたような知見であるが、外的な目的を設けて文学を手段に変えること（例えば革命のためのプロレタリア文学）を拒否した葉山文学は、その使命の必然的な帰結により、実現した結果、その「過程」に宿るディテールを切り捨てることができなかつた。寄生とは共生であり、一個体で完結しない生命同士の「過程」的アスペクトであるのだとしたら、それは独立した一人前の大人に憧れながらも、繰り返して葉山のテキスト上に（嫌悪しつつも）登場してしまう半人前の諸々の「寄生虫」の存在によって象徴されているといえる。

目的、つまりは終わり（＝目的 end）の拒否、そして終わらなさそのものを目的化すること。幸福とは寄生虫ではないか、というアイデアを提起していた『求めよ』は、「結論」というものを拒否し、「結論」の後に後記を付け加える書き方を採用しているが、それは終わりの恣意性を看破し、実感として獲得した寄生虫の「永遠」的しぶとさを切り捨てることができなかつた、葉山文学の本質的表現として考えることができる。後記を付け加え、「結論」を「過程」に変換することで、終わりが繰り延べされる。それは『寄生虫』のメッセージの端的な要約ともなっている。最後にこれを引用しよう、小説『求めよ』は次のように締めくくられている。

「結論と云ふものは、本来最後に出て来るべきものであるが、私の場合では結論の後が続く。何故かならば生活には結論がないのであるから。すつかり一生の跡片付けをしてしまつて、「サア、これで死ぬんだ」と云つて死ぬ人間なんかありはしない」（『求めよ』）

※葉山嘉樹の引用はすべて『葉山嘉樹全集』（筑摩書房、昭五〇・四～五一・六）を用いた。なお引用文中の〔〕は引用者による註記であり、／は改行を意味する。

（2014.02.01）

葉山嘉樹の寄生虫

<http://p.booklog.jp/book/82036>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82036>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82036>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ